

特別な二人

Wedge White

「んつ……ううんつ……。今日、あつついね……さすがに寝苦しいよ……」
直樹が私の家に泊まりに来た夜。

色々な意味で熱くって中々寝付けなかつた。

まだエアコンを点けるような季節でもないし。でも、暑いものは暑いし……。
「なら、ちょっと砂浜でも歩いてみるか？潮風が気持ちいいだろうしさ」

「ええつ、こんな時間に？」

「なんだよ、夜出歩くのが怖いとか言うのか？」

「そ、そうじやなくつて……！わ、わかつたよ。行こ……！」

「トイレ行つてから出るか？」

「えつ、なんで？別にいいけど……」

「ちびるかもしれないし」

「な、何言つてるの!?私そんな子どもじやないーー！」

「あははつ、悪い悪い」

「うーつ、直樹の意地悪つ……」

なんて小競り合いがあつたりしたけど、二人で浜辺に向かう。……一応、トイレは済ませて。「海は大好きだし、色んな時間帯に遊びに行つてたつもりだけど、さすがにこの時間はない、かな……」

「考えてみたら俺も初めてかな。海と言えば泳ぎに来るものだし、こんな時間に泳げるはずないし」

「でも、月の明かりに照らされる海つて……奇麗だね。見慣れたはずの海なのに、なんだか不思議で……特別な感じ」

「だな。……見慣れたやつの、特別で意外な一面、つてことか」

「えつ？ どういうこと？」

「なんていうかさ……お前もよく言うけど、あかりが俺にその、女っぽい姿を見せるつて想像できなかつたから」

「そ、それは……直樹が最初にそういうの、私に求めたんじやないの？」

「俺は、その、ただ……あかりが可愛いな、とか思つて……そしたら、もつとあかりが可愛い姿見せるようになつて、なんていうか……」

直樹はうつむきながら、吐き捨てるように言う。

すぐに照れてるつてわかつて、なんだか面白い。

「それを見て私、直樹もなんだかんだ女の子が気になるんだな、つてわかつちやつたなー。だつて昔は私も男の子みたいに遊び回つてたでしょ？あの時は絶対、直樹が私を女の子扱いしてないと思つてたし」

「まあ、あかりは昔からでつかくて、運動神経もよかつたからな……。最近やつと、ウエイトのお陰で安定して運動で勝てるようになつてきただいで」

「ウエイト言うなー！その重りをありがたそうに揉んだり、拳句の果てにおちんちん気持ちよくするために使つてもらつたりしてるので、誰かなー？」

「そ、それは、その……」

「本当、直樹つてばおっぱい好きなんだから。……まあ、ちょっと安心できたけど」別に、コンプレックスだつた訳じやないし、嫌いだつた訳でもないけど……積極的に肯定することもできなかつた、私の胸。

だけど、それを直樹が好きだ、つて。楽しそうに嬉しそうに、揉んでくれたから、もつと私は私の体のこと好きになれた。

だから本当に感謝なんだけど、これをネタに直樹をからかうのも面白かつたりして。

「そういうお前こそ、すっかり工口くなつたよな。エツチする度にあんなにイキまくつて」「は、はあつ!?あ、あれはただの直樹の気分を盛り上げてあげるための演技だし……！だつて、

ああでもしないと、ああ、俺つてエツチ下手なんだなー、って直樹が自信失くしちゃうじやん

「なんだよ、なら演技で潮吹きまでしてるつて言うのか？」

「そ、そ、そ、う、だ、よ、……！もつと我慢しようと思えばできるけど、直樹を想つて感じてあげてるん
だから」

「へーえ、じゃあ今度は演技抜きでやろうぜ。足腰立たなくなるぐらい感じさせてやるから」
「い、いいよ……！直樹の方こそ、精液出し過ぎて枯れ果てないようにな!!」

「……つたく。よくもまあ、俺もお前も外でこんなこと言えるようになつたもんだな。……誰
も聞いてないつてわかってるけど、前まではお前、下ネタつて嫌いそうだつたし」

直樹は妙に昔を懐かしむような、ほつこりした表情を見せていた。

私からしても、なんだか珍しい表情な気がする。いつもはもつといたずらつぱかつたり、気
の抜けた表情をしているのに。

「意味もなくエツチなこと言いたがる女の子なんている訳ないでしょ……」

「まあ、確かに。俺も、男に関してもそういう品のない連中は嫌いだからな」

「直樹、品があるの？」

「少なくとも下品じやないだろ」

「……まあね」

少しだけ照れくさそうに頬をかく直樹。

直樹はよく、私のことを照れ屋ですぐに顔を赤くするつて言うけど、直樹だつて同じだと思
う。

「それで、私がエッチなことを直樹の前でだけは言うようになつたこと、だつけ。……だつて
さ、前までは友達だつたから、わざわざそんなこと言う必要なかつたし、確かに嫌いだつたけ
ど。……でも今は、実際にエッチもする恋人なんだもん。どうせエッチの時は勢いで色々言つ
ちゃつてるんだから、あんまり気にならないかな、とか思つて」

「そつか。……やっぱりあかり、すごいエロいな」

「エ、エロくないつて……！直樹の方こそ、一生懸命腰振つててさ。私、割りと冷静にその姿
見てるんだから……」

「なつ……そ、そんなとこしつかり見るなよ……」

直樹はそう言つて恥ずかしそうに視線を反らす。……可愛い。

お互にちつちやい頃ならともかく、大きくなつてから直樹に対して可愛いなんて感想、抱
いたことなかつたと思うけど、恋人になつた今、あちこち直樹の素敵なところ……可愛いとこ
ろが見つかる気がする。

「でも、そうやつて直樹が気持ちいいつて喜んでるところを見るの、好きだな。……なんかね、
安心できるの。ちゃんと気持ちよくなつてくれてるんだ、つて」

「なんだよそれ……それなら、俺の方こそ不安だつて。俺が性欲を発散するためにあかりを使

つて いるだけなんじや ないか、つて。……それなら、やつぱり 恋人として 嫌だな、申し訳ないな、つて 思う。だから、あかりにも 楽しんでもらおうつて……

「それが 連続で イカセちやうことなの？」

「なんて、 ちよつと 意地悪。

「そ、 それは…… その…… 嫌、 だつたか？」

「う、 ううん…… それはまあ、 びつくりは したけど、 普通に 楽しめたし…… また、 やつて もらいたいとか、 思う、 かな……」

「そ、 そつか」

なんだか お互い 微妙な 雰囲気になつちやつて、 意味もなく 海を 眺めて いた。
静かな 波の 音。 だけど、 ちよつとざわざわ しちやつて いる 胸の中。

「………… 直樹」

きゆつ、と 直樹の 手を 捣んだ。 握る というよりも、 強めに。 恋人同士が する というよりは、友達同士が 握手する ように、 かつちりと。

「………… あかり？」

「好き」

「な、 なんだよ、 急に……」

「ぼつ、と。 月明かりに 照らされた 直樹の 顔が 赤く 染まる のが わかつた。

「言いたかったの。直樹のこと、好きって」

「……そつか」

「直樹は？」

「それ、わざわざ言わないとダメなのか？」

「私は言つたよ」

「大好きだよ、お前のこと」

「…………そつか」

横に並んで海を見つめて。あえて向かい合わずに、もう何度も目かまわからぬくらい、好きという気持ちをぶつけあつた。

エツチの時は激しく、本能のままに好き合つてる感じだけど。今はちょっとだけ冷静に。しみじみと。

ずっと昔からずっと一緒にいた。

ただの幼馴染と思つていた相手のことが、異性として好きになる。不思議なような、当然なような。そんな気持ちを噛み締めて。

「……キス、する？」

「するか……」

「んつ」

そう言つて、ようやく向かい合つて。少しだけ背伸びをして、直樹のことを抱きしめた。

「んつ……ちゆるつ……じゆつ、じゆれろつ……れろろおつ……じゆつ、じゆるるううつ……！じゆつ、ちゆるるうつ、ちゆつ、ちゆるるううつ……！」

激しく相手のことを求めるディープキス。

絶対に他の人とはしない、特別なコミュニケーション。

嬉しくて、どこか誇らしくて。大人になれた氣のする、エッチな触れ合い。

「じゆづるううつ……！じゆつぶつ、じゆつ、じゆるるじゆうつ！ずつ、ずずるうつ……じゆぶつ、じゆるつぶつ、じゆるるうううつ……！」

舌が疲れてしまうぐらいまで、し続けて。

それでも、直樹と離れるのが寂しくて、ギリギリまで舌を絡め合つていた。

「じゆるううつ……じゆつ、んぶああつ!!な、直樹つ…………」

「あかり…………」

少しだけ、視界が涙で歪む。このまま、したい……そんな気持ちが芽生えてしまう。

横になる前にもう、一回しちやつてたのに……今でも中には直樹の精液、入つてているような

……そんな気がしているのに。

「もうちょっと砂浜、歩こつか」

「そ、そだな」

無理やり気持ちを落ち着かせるように、一緒に歩く。もう手をつなぐこともなく、昔と同じように。並んで。

直樹の歩幅の方がちょっとだけ大きいけど、私は全然大丈夫。後ろからついていくのは、なんか私らしくないし。いつだつてすぐ傍に。背中を追いかけるでも、背中を追いかけてもらうでもなく。

「そういえばさ、あかり。覚えてるか？昔、山に探検しにいった時のこと」

「あ、あー……そういうこともあつたね。というか直樹、私を無理やり連れて行つたんじやなかつたつけ」

「まあ、細かいことはいいだろ。……あの時は楽しかったよな。山の誰も知らないところに、秘密基地を作ろうとか言い出してさ。今思えば、誰も知らない場所なんてあるはずないのにな」「ねーつ、山つて言つてもめちゃくちゃおつきい訳じやないし、どつかの家の持つてる山なんだもん。未開の地でもなんでもないのに」

昔、探検家ごつこみたいな遊びが流行つたことがあつた。多分、テレビか何かで見て、それに影響されてたんだと思うけど。

普通、そういう遊びつて男の子のもののはずなのに、私はそれに違和感なく混ざつてて。⋮ホント、やんちゃしてたなあ。

「けど、楽しかつたな。あの頃のあかりつてさ、今ほどしつかりしてないっていうか、割りと

泣き虫な方だったのに、俺について来れてたんだから、気合入つてたよな」

「気合っていうか……自分自身、めちゃくちゃ楽しんじやつてたからなんだろうね。気づいたら、他の子はみんな帰っちゃつて、直樹と二人きりで」

「で、それに気づいたあかりが泣き出したんだよな。『もうおうちにかえれないー!』って」

「えつ?!いやいやいや、直樹が泣き出したんでしょ『このまま』はんたべれなくてしんじやうんだー!』ってさ」

「はあ? そんな訳ないだろ。俺が誘つたんだし、いわば隊長なんだから、隊長が音を上げる訳あるもん」

「都合のいい記憶してるねー。私、必死に泣いてる直樹をなだめて、山を下りようとした記憶

あるもん」

「そ、そんな訳ないだろ……ベソかいてたのはあかりの方だ」

「ううん、絶対に直樹だもん」

「なんだよその自信」

「直樹の方こそ、私のこと甘く見過ぎじゃない?」

……思わず、お互いに顔を突き合わせて睨み合つて……。

「ふつ、はははつ……!」

「あはははは! 何やつてるんだろうね、私たち」

「ホントな」

同時に吹き出してしまつていた。

こうやつて、未だにちつちやい頃みたいに意地を張り合つて。でも、だからこそそんな、気の置けない悪友つていう関係が居心地よくて。

——私たちは、二人きりでいる時は、『秘密の恋人』だけど、同時に昔から変わらない親友で。その時々によつて、意地を張り合う悪友にも、好きつて言い合う恋人にもなれる。そんな勝手で、自由で。だからこそ楽しい……『特別な二人』なんだ。

「じゃ、そろそろ帰つて寝よつか」

「だな。ふあつ……歩きながら寝そだ……」

「もうつ、ホントに寝たりしないでよ。運ぶの大変なんだから」

「へーきへーき……ぐがあつ……」

「もたれかからないで！おもいー!!」

ちなみに朝起きてから、お母さんに聞いてみたら、結構大事になつちやつてて、なんとか山から下りてきた瞬間、私たちは同時に泣いちゃつたみたい。

「引き分け、かあ……」『タツチの差で俺の方が後だつたとか、ないですか？』なかつたらしい。

特別な二人

2019年 7月21日 初版

奥 付

著者 Wedge White
URL <https://wedgewhite-team.wixsite.com/home>
E-Mail konjyoyasuhiro@gmail.com

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
(<http://tokimi.sylphid.jp/>)